



【真の回復の始まり:ミツパ】

聖書本文: 第一サムエル記7章3-12節・暗唱聖句: 第一サムエル記7章12節

説教者: 鄭南哲牧師
(Rev. Jung nam-chul)

今日我々を招く本文は第一サムエル記です。士師記、ルツ記に続き、第一サムエルは王朝時代の歴史を始める初めての聖書です。第一サムエルから始め六冊の聖書、つまり第一、第二サムエル、第一第二列王記、第一、第二歴代誌は約500年間のイスラエルの歴史が記録されていますが、今日読んだ第一サムエルはこの歴史が始まる始めの聖書です。この第一サムエルは神様の預言者サムエルの出生と、登場、そしてサウル王の死に至るまでの約90年間(BC1105-BC1011)の歴史が記録されています。もちろん16章以後からはダビデに対する記録が記されますが、イスラエルの初の王になるサウルに対する内容が主(おも)に第一サムエル記に出てくる中心人物だと言えます。先ほど読んだ本文は士師時代の末期の宗教的墮落と国家的危機の前で、召された預言者サムエルがどうやってこの難局(なんきょく)を開いていくのかが記録されています。

＜預言者サムエル時代の問題と危機＞

士師時代の末期、つまり、紀元前1100-1000年に至る士師時代は宗教的な面でも、民族的にも深刻な危機と混乱の時期でした。この時代の問題をおもに三つでまとめることができます。

一つは、偶像崇拜の問題でした。

どんな時代も同じでだと思いますが、創造主の神様以外に人間が作ったほかの神々を拝む偶像崇拜はあらゆる問題の源(みなもと)でした。これがおが国家的危機の主なる理由であり、宗教的墮落の原因でした。偶像崇拜は神様から離れさせます。イスラエルの民は神様から離れ、異邦の神々とバアルとアシュタロテに拝みました。先月申し上げたようにバアルという言葉の意味は`主人`という意味で当時`豊作の神`であって、アシュタロテは`性(sex)と多産の神`でした。

それだけではなく、イスラエルの民はペリシテのダゴン(Dagon)という神々を拝みました。ダゴン神は頭と両手は人ですが、体は魚姿の神として、これも当時豊作の神々でした。唯一の創造主なる神様を信じていたイスラエルの民が神から離れ人間が作った神々を拝んでしまったのです。宗教の混合主義(こんごうしゅぎ)と多神論に陥り、まことの神様を失ってしまいました。

二つ目は、宗教的墮落でした。

特に、霊的指導者たちの墮落は深刻でした。民たちは偶像を崇拜し、指導者たちは霊的に鈍くなり、道徳的に墮落し、神様への礼拝は形だけのものになってしまいました。エリがイスラエルの祭司としている時、そしてサムエルがまだ幼いとき、宗教的墮落は極めていました。

混乱の状態では指導者が堅く立たなければ、まことの改革は起こるはずがありません。イスラエルの祭司だったエリがどれほど霊的に鈍かったのか表してくれる出来事がハンナの祈りの出来事です。第一サムエル記がハンナという一人の女の祈りから始まるということはいろんな意味を含んでいると思います。家の跡を継がせるために子孫が大切だった時代にハンナには子供がいませんでした。さらに、夫であるエルカナはもう一人の妻によって子供を生み、エルカナの子を生んだもう一人の妻から侮辱を受ける苦しみの中にいました。その時神様を信じていたハンナは神様の御前に出て切に祈り始めます。椅子に座って捧げる余裕のある祈りではありませんでした。ハンナの祈りはいのちをかけて、胸をたたき、泣きながらささげる切なる祈りでした。1章15節でハンナの祈りを`主の前に心を注ぎ出した`と訳されていますが、ヘブル聖書には`神の前で魂を注ぎ出す祈り(pouring out)`として訳されています。神様の前でこれほど切に祈りをささげているハンナをみて祭司エリはなんと言いますか? `いつまで酔っているのか? 酔いをさましなさい`(1:14)

神様にむかって切に祈っている女を酒によっていると勘違いするほど、エリ祭司は霊的に鈍くなっていたのです。これは自分自身もこのような祈りをしたことも見たこともなかったという意味です。それだけではなく、2章12節以下にはエリ祭司の子供たちの罪に対して記録されています。第一サムエル2章12節からは祭司エリの二人の息子であるホフニとピネハスの墮落についても記録されています。神様にささげるべき祭壇のいけにえをこの息子たちが盗み、それだけではなく宮で仕えていた女たちと淫乱な罪を犯しました。これはつまり、神様を恐れなかったということです。しかし、もっと深刻な問題はエリ祭司は神様より自分の子供たちを重んじて彼らの罪を見逃そうとしたことです。(第一サムエル2:29)

エリ祭司の家庭だけではなく、その時代のイスラエルの家庭はみな神様の前で罪を犯すことへの恐れもなく、霊的に乱れていたのです。

ですから、神様の前で中身はなくおもてだけの宗教的儀式は当然神様に喜ばされたはずがありません。さらに、このような墮落と犯罪の中、悔い改めなかったため神様の赦しのチャンスは過ぎてしまったということです。(第一サムエル3:1-14)

この時期の三つ目の問題は国家的な危機でした。

この危機というのは周囲の国々からの侵略でした。7章3節の御言葉のように、もうイスラエルの民たちはペリシテという国の支配の下にありました。ペリシテは当時すでに鉄製(てつせい)の武器をもった軍隊だったし、イスラエルにおいての一番おそろしい敵国でした。彼らは40年間(BC1087-1047)イスラエルを苦しめ、女たちを連れて行き、人々を殺し、いろんなものを略奪(りやくだつ)していきました。ですから、イスラエルはたえず、ペリシテ人たちと戦わなければなりません。この状況を表せてくれるところが第一サムエル4章の内容です。ペリシテ軍隊の攻撃によってイスラエルの民4000人が死んで、エリの息子ホフニとピネハスにより神の契約の箱を立たせますが、むしろイスラエルの軍人3万人が死に、契約の箱まで奪われ、ホフニとピネハスもなくなります。この知らせを聞いた98歳のエリ祭司もその衝撃で首が折れて死んでしまい、ピネハスの妻も子を産む途中で死んでしまいます。神様の臨在と栄光が去られたイスラエルとエリ祭司の家庭に対する神様の裁きでした。祭司の家庭が神様の裁きを受けるほどであ

ったならイスラエルの民たちはどれぐらいだったか想像できるでしょうか。

これほどなんの希望もなく、苦しみと試練が続く士師時代の末期、神様はついに神様の預言者一人を立たせ救いと希望の光を照らして下さいます。

<神様の方法による回復>

国家的にも、教会的にも、家庭的危機を神様はサムエルを通して、どうやって解決していかれたのか、これが我々が注目すべき部分であり、さきほど読んだ本文の内容でもあります。

<サムエルの登場>

祭司エリの死と同時に350年間の士師時代が幕を閉じて、神様は新しい預言者サムエルを立たせ、新しい歴史を始めていかれるのです。

神様はサムエルを立たせ、偶像崇拜、道徳的墮落、霊的な暗闇、周りの国からの攻撃による苦しみなどイスラエルに起こっているすべての危機は神様から離れることから始まった事を知らせました。まるで、人が癌になったとき、癌のしこりを取らなければまた再発され広がっているようにイスラエルの民族もそうなったのです。これで、**預言者サムエルのとった行動は“外国の神々やアシュタロテを取り除きます。”(第一サムエル7:3,4)そしてミツパというところに全イスラエルを集めさせます。(5節)そして“私たちは主に対して罪を犯しました。”(6節)と全国民的悔い改めの時間を持ちます。**とっても単純な行為のように見えますが、これがまさに問題解決と神様との回復の始まりです。!!3節をみてください”もし、あなたがたが心を尽くして主に帰り、あなたがたの間から外国の神々やアシュタロテを取り除き、心を主に向け、主にのみ仕えるなら、主はあなたたがをペリシテ人の手から救い出されます。”と約束されました。

サムエルは神様の民たちが神様との関係の回復なしにはどんな努力も無意味であることを知っていました。結局サムエルの指導によりミツパでの悔い改めの運動が始まりました。

彼らは ***私たちは罪を犯しました***と告白しながら神様の哀れみを求めました。これが神様の民がふたたび生かされる力の源になりました。その力とは人々の内側から出てくるのではなく上から注がれる神様からの力であり、恵みでした。このミツパの悔い改めの場に神様もともにおられました。イギリスでも、アメリカでも、韓国でもこのような悔い改めの運動によって人々が罪から離れ、主の教会がますますリバイバルされ、民族が回復される機会がありました。この日本にもこのような悔い改めの運動が起きなければなりません。ほかのところからではなく我々のクリスチャンプレイズチャーチから、各家庭から、一人一人からまず悔い改めの運動が起こされなければなりません。

人は問題が起きると、その原因をいつも自分からではなく外側から探そうとしています。しかし、問題の根本的原因はむしろ、我々の中に、自分の中にあることを忘れてはいけません。

<ミツパでの悔い改めの結果>

全イスラエルがミツパで集まって断食しているうちに、ペリシテの軍隊がこのチャンスをつかんで、攻撃し始めました。ミツパというところは敵から守られないようにさらされた場所だったからです。人間の目で見ると、無防備状態で、さらに全イスラエル人が一つのところに集まっているわけですから、これほど簡単な戦いはなかったと思います。ペリシテ人たちは攻撃し始めました。霊的に見る目がない彼らにとっては最高に良いチャンスでした。しかし、彼らはむちゃな挑戦をしてきた結果になってしまいました。なぜでしょうか?全能なる神様がイスラエル人とともにおられたからです。全能なる神様の御手を経験した事がないペリシテ人はむしろイスラエルに打ち負かされました。

イスラエルの民が神様に向かって懇願した時、神様は大きな雷鳴をとどろかせ、彼らをかき乱し、退けさせました。人の考えでは信じられないことが起きたのです。人の戦いでしたが、神様が代わりに戦ってくださったのです。

第一サムエル2章6、7節をみてください。”主は殺し、また生かし、よみに下し、また上げる。主は貧しくし、また富ませ、低くし、また高くするのはです。”8節以下にも神様はどんな方であるかを告白しています。特に9節を見ると”主は聖徒たちの足を守られます。悪者どもは、やみの中に滅びうせます。まことに人は、おのれの力によっては勝てません。” **アーメン!!!!**

数多くの戦いにおける勝利は軍人の数ではありません。武器の優秀性にありません。卓越した作戦でもありません。ただ、神様の御手がともにおられるのがが大事です。神様の御手がイスラエルとともにおられたため、彼らは守られ、戦いから勝つことができたのです。

<今日のための御言葉>

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん!

今日第一サムエルの本文によると、霊的指導者として召されたサムエルがどんな方法で民族の問題を解決したのかが分かります。自分が属した家庭、共同体、自分が属している教会にもこのような問題があるかもしれません。そのときは、覚えましょう。

問題は我々の外側ではなく、自分にあるのではないかと考えて見ましょう。神様のみを信じないで、神様を恐れなくて、まことに悔い改めない我々の不信仰こそが問題ではないかを。。これを解決しない限りは、神様の哀れみと赦しによるまことの回復を経験することができません。

中世時代、教会が腐敗したと言われますが、それは教会堂の建物が古くなり、くさくなってきたという意味ではありません。当時、神様を信じていた彼らの信仰が霊的に乱れ、宗教指導者たちが腐敗し、神様を離れ、霊的に暗くなったという意味です。神様はサムエルを立たせ、霊的刷新(さっしん)をとおして国家の危機、家庭の危機、教会の危機を乗り越えさせました。

サムエルは靈的にきよめられることにより、ほかの神々から離れ、悔い改めと信仰の回復をとおして、危機と苦しみと道徳的墮落からイスラエルを救い出させました。これらのことをとおして我々が学ばされることは我々のあらゆる問題は根本的に神様との関係からであることです。神様を心から信じ、悔い改める者には希望があります。人の努力と方法では解決されないことが神様の方法で解決され始めます。神様の御力に謙遜に従うことが最高の武器です。“我々が罪を犯しました。私が罪を犯しました。”ハンナのような切なる告白があるとき、希望が芽生えてきます。その時から神は御手を差し伸べ助けて下さいます。神様がともにおられれば、どうしてもできなさそうな悩みや、問題も解決されます。多くの戦いから勝利することができる事を信じてください。

我々のすべてをすでにご存知であり、見ておられる全能なる神様の御前で、自分だけの隠しておいた秘密の部屋をあけて、神様のもとにもって行きましょう。そして、神様の哀れみと赦しを経験し、回復を経験するこの9月クリスチャンプレイズの全神の子供たちとなりますよう主イエス・キリストの御名によって祝福します。アーメン!!